

水を通じて広がった世界—言語地域としての東南アジア大陸部

峰岸 真琴 (言語学：東南アジア、南アジア)

はじめに

1998年10月の公開シンポジウム「危機に瀕した言語」で、筆者は「東南アジアおよびその周辺の言語状況」について報告した。講演後、フロアとのやりとりの中で、田中克彦氏をはじめ一般参加者からも、言語研究のあり方に関する重要な問題提起があった。

そこで、まずシンポジウムでの講演内容のあらましを述べ、さらに「危機に瀕した言語」の研究の意義と、これからの研究のあり方について私見を述べることにしたい。

地域としての東南アジア大陸部

東南アジアというと、現在のASEAN加盟国を思い浮かべる方も多であろう。

ここでは東南アジア諸国という国家の枠を越えて、中国、インドなどの隣接する地域を含めた広義の東南アジア大陸部の言語状況に話題を限定する。

言語はその話し手の生活する自然、生活環境とともにある。そこでまず東南アジアの自然環境を見てみよう。(地図参照のこと。)

東南アジアはアジア大陸の南東部に位置し、大きく大陸部と島嶼部に分けられる。高谷(1985)によれば、東南アジア大陸部の地形は大陸部北部(海拔500~2000m)の隆起山地、全体としては平坦な平原(海拔数百m以下)、イラワジ、チャオプラヤ、メコンなどの大河の河口の沖積低地であるデルタの3つに分類される。

歴史的には、山地部で少数民族が陸稲、雑穀の焼き畑を行い、山間盆地部ではチェンマイ、ルアンプラバーンなどの王国が小規模の米作を基盤に成立した。平原部ではかつてカンボジアのクメール諸王朝、ビルマのパガン王国などが大規模な米作を行った。デルタ部はごく近代になってから急速に発展し、近代化や国民国家形成の主力となるタイ、ビルマ、ヴェトナム民族が発展する舞台となった。

さらに地図を見ていくと、中国西南部から東南アジアの北部にかけては大河の源流が集中している。これらの大河の周期的な洪水が、土地を肥沃化し、下流の農業を豊かにしてきた。また人々は耕地を求め、川に沿って低地への民

族移動を繰り返してきた。

川が海に注ぐ地域においては、外部世界の大文明との接触が行われ、港市が発達した。海を通じて、インドの高文化の受容、土着化が行われた。文字、バラモン教、大乘仏教、上座部仏教の受容はその例である。

このように、東南アジア世界は川を通じて中国西南部と民族、基層文化の上でのつながりを持ち、海を通じてインドを始めとする外部世界、高文化と接するという、「水を通じて広がった世界」であるといえよう。

言語世界としての東南アジア

言語系統論の観点から見ると、東南アジア大陸部にはオーストロネシア、オーストロアジア、タイ・カダイ、シナ・チベット、ミャオ・ヤオの5つの言語グループに属する多様な少数民族言語がモザイク状に入り組んで分布している。これらの諸言語は、ほぼ上記の順に東南アジアに出現したと考えられている。

また、系統分類を越えて、東南アジア大陸部の多くの言語には「孤立語性」、「単音節性」、声調などの「超分節音素」の存在といった類型上の共通点がある。

これらの特徴は東南アジアの全ての言語に共通するものではないが、ほとんどに当てはまるだけでなく、実は漢語を中心とする東アジアの諸言語にも共通するものである。

これらの言語の系統、類型、地理的分布を言語学的にどう考えるかに関して、これまでに「言語類型地理論」と「シャン文化圏」という議論が展開されてきた。

橋本(1978)は、東アジアから東南アジアにかけて分布する、相互に長期間影響を与えあってきた「農耕民型」言語の集合体は、従来の比較言語学的な見地からの研究では捉えきれないとし、言語系統を超え、東アジア大陸の諸言語を連続体として見ることを提唱した。

新谷(1998)は、中国西南部から東南アジアにわたる山間盆地地帯を言語と文化の複合体として捉え、シャン文化圏(英語ではTai Cultural Area)と名付けた。

この地域では、タイ諸語系、チベット・ビルマ諸語系、モン・クメール諸語系、漢語系の言語が話されているが、卓越する優位語のない多言語併用世界であるという特徴を持っている。シャン文化圏の研究は、言語学者、民族学者、歴史学者に「言語とは、民族とはなにか」という根源的な問い直しを迫るものである。

東南アジア的言語世界の広がり

メコン（チベット、中国西南部、ラオス、タイ、カンボジア）、サルウィン川の流域に留まらず、さらに紅河（ヴェトナム北部）、イラワジ、ブラフマプトラ（チベット、インド東北部）流域を視野に入れて東南アジアを考えると、さらに大きな世界が見えてくる。

インド東北部にあるアッサム地方は、チベットビルマ系言語の宝庫である。しかし、それ以外にも東南アジア大陸部と深い関係を持つタイ系、オーストロアジア系言語も分布している。

筆者はアッサム地方のうち、マニプール州のインパールとメガラヤ州のシロンの調査を行ったことがあるが、実際に現地を訪れると、低地インドとは全く異なる「東南アジア世界」の一部であることを、風土と人間から実感させられる。

危機に瀕した言語の状況

国民国家の形成とその基盤強化の結果、少数民族の言語が消滅に向かう傾向は世界的なものであろう。この意味で最も深刻な危機にある民族として、狩猟採集など、不安定な生活手段に頼る、タイ北部の山地のムラブリ（ピートンルアン）族、マレーシア山地部のアスリ諸語の話し手などが存在する。

しかし、多様な民族の宝庫である東南アジアの場合、消滅が目前に迫っている言語だけでなく、国家形成に至らなかった少数民族の言葉は、すべて危機的な状況にあるともいえる。東南アジアの民族分布が、それぞれのよって立つ経済基盤と密接な関係を持つことは既に述べた。おおざっぱにまとめると、東南アジア諸国が国民国家としてその基盤を固めていく過程は、山地部が盆地部経済に組み込まれ、さらに平原部、盆地部がデルタ部経済に組み込まれていく「山地部 < 盆地部 < 平原部 < デルタ部」と図式化することができる。つまり、生態系の違いによって垂直分布していた各民族が、経済発展によって高度差を失い、低地社会へと呑み込まれていく過程として捉えられよう。

以下ではごく簡単に、各地の言語状況について述べることにする。

中国西南部

「デルタ部」と呼ぶのは適当でないが、圧倒的な漢族の世界が雲南の盆地部へと進入し、急速に漢化が進んでいる。文化大革命時には少数民族の存在そのものが危機に瀕したが、現在は復興に向かっていく。多くの「（外国人に対する）未解放地域」が今も存在し、まだまだ知られていない民族がたくさんあるはずである。

ヴェトナム、タイ、カンボジア

「デルタ部」には国家の主要民族が多数を占め、経済的にも解放が進んだ結果、他の少数民族がそれに同化して消滅に向かうと予想される。

タイの山地民社会は、経済の発展に伴って山を降りざるを得ない状況に追い込まれ、崩壊に向かっていく。東北部平原のクメール系タイ人も教育とテレビなどマスメディアの普及に伴い、タイ語とのバイリンガル化が進んでいる。

Schliesinger(1997)によると、ヴェトナムの場合主要民族であるキン族の他に公称 54 の少数民族を抱えているが、そのうち 41 の民族が人口 10 万人以下、さらにその 20 の民族が人口 1 万人以下であり、経済発展とともにそのほとんどが消滅の危機にさらされる可能性が高い。中でも Sila(600 人), Pu Peo(380 人), Ro Mam (250 人), Brau (230 人), O Du (200 人) などは既に消滅の危機に瀕している。

カンボジアとヴェトナムの国境付近にも少数山地民族が存在するが、政情不安のため研究は進んでいない。

ラオス、ミャンマー（シャン文化圏）

内陸国家であるラオスには「デルタ部」が存在せず、また民族構成が上記の場合ほど極端に偏っていないので、多民族共存の状態にあるといえるが、山地部の「盆地部化」はゆるやかに進行している。今後ラーオ人、ビルマ人などが政治、経済的な優位性を高めてゆくことがあれば、民族間のバランスが変化してゆく可能性が高い。

インド東北部

憲法に記載された公用語としてのヒンディー語の他、アッサム語、ベンガル語など隣接する「デルタ部」の州の公用語が、経済力を背景に進出しつつある。さらにバングラデ

シュからのベンガル人の流入などもあって、土着の民族の危機感が高まっており、外来者へのテロ、独立州獲得運動など、政情不安が深刻化している。

インド東北7州からなるアッサム地方はいわば「インド最後の秘境」であり、興味深い少数民族の宝庫であるが、政情不安などのため、外国人がこの地域に入ることはもはや難しくなった。

危機に瀕した言語にどう取り組むか

ここでは言語の消滅を巡る言語学の問題について、改めて考えてみたい。

ある言語が消滅するのは、最後の話し手の死とともに劇的に消滅する「あからさまな死」だけではない。民族が名を残しつつも、話し手が母語以外の「大言語」を習得することで、より大きな言語集団に呑み込まれてゆくという、目に見えづらい「緩慢な死」もある。

あからさまな「民族・言語の死」は、ある程度世間の耳目を集める。しかしその絶滅は多くの人にとって他人事であるのも事実である。「現代社会に社会・経済的に不適合を起こした民族が消えていくのはしかたがない」という厳しい意見さえも時に聞かれる。そのような言語の調査、記述、保存、再興がなぜ必要なのか、ましてこの不景気に日本人の税金を外国の諸民族の言語・文化のために使う必要があるのか、というわけである。

こう問われれば、たいいてい言語学者はうまく答えることができない。衰退産業の延命措置、無能経営者の後始末のための税金投入だの「まっとうな」世間の人々が大事だと思うことにうんざりして、もとい、それより言語のもつ形式の美しさに惹かれて、世間の片隅に身を置くようにして言語学を志したんですから…。

それでも、そんな我が身を省みず、我々がこの問題にどう取り組むべきかを、あえて述べることにする。

危機に瀕した言語の研究の意義

危機に瀕した言語の研究は、言語そのものの生成・消滅を総合的に捉える言語動態研究の一分野として捉えうる。「あからさまな死」は最も極端な例外的な場合であるが、より一般的な「緩慢な死」による言語の消滅の場合に限っていえば、話し手は死ぬわけではなく、別な言語を習得して使うのである。つまり消滅は一方で、「ピジン」「クレ

オール」など、新しい言語が誕生する機会でもある。「うつりゆくこそことば」であるとすれば、死は新たな生の始まりでもある。

つまり、この研究を進めることは、単に消滅の危機に瀕した言語についての後ろ向きの研究ではなく、言語学の先端の問題でありうる。通時的言語理論が前世紀の素朴な生物進化論を背景に誕生し、主として文字言語を対象として発達したことを考えて見よ。フィールドワークを基礎とする言語動態に関する理論の深化は、通時言語学や社会言語学の新たな展開を促す可能性を秘めている。

ただし、このような「言語学のための言語学」研究の意義は、言語学者の仲間内の理屈に過ぎない。

危機に瀕したコミュニティーの人々は、「それが私たち自身に何の意味があるのか」と問うであろう。

では、言語学者は何を現地に還元できるのか？専門的な見地から、テキスト編纂などを通じた言語教育、辞書の編纂に関わってゆくことが、個々の言語学者から現地社会への最大の貢献となるのかもしれない。

しかし筆者はここで、あえて我々が苦手とするものの必要性を訴えたい。すなわち、「研究の共同化・組織化」と「社会への訴えかけ」との二点である。

今まで言語学者は、自ら課した課題に取り組む際に、知識・技術を修得し、個人の能力を高めるといふ、いわば「芸」の世界に閉じこもってきた。もともと日本的な学問風土には師から弟子への芸の継承という面があったし、人文科学の発展と継承には本質的にこのような性格があるのかもしれない。

しかし、今後我々がすべきことが、全人類的な言語文化の継承と発展に関わるのであれば、そのような小さな世界に閉じこもっているわけにはいかない。そのための組織作りをし、大きな声で情報を発信してゆかねばならない。

自戒を込めていえば、フィールドに入る言語学者は調査そのものにのめりこみ、研究自体のもつ社会性の自覚に欠ける傾向があるため、学問とそれを支える組織を形成し、隣接研究分野や社会に訴えることの必要性の認識に欠けているのではないか。

我々のなすべきこと

個々の研究者が緊急性の高い言語の研究を行うことが重要であることはもちろんだが、このほかに、言語学者が組織的に行う必要のあることとして、以下のようなことが考えられる。

第一に、危機に瀕した民族に関する言語と文化のデータベースを構築し、ネットワークで公開すること。重要なのは、特定の言語学者の研究業績よりもむしろ、情報の公開による共有である。テクニカルな論文よりも、記述が重要である。

特に、特定地域のフィールドワークを行う言語学者は、他地域の情報から取り残され、孤立しやすい。世界全体の言語状況を見渡すような視点からの、組織的バックアップが必要である。言語学者に欠けているのは、この研究の組織作りと運営に関するノウハウであると思う。

第二に、言語地域ごとの語彙、文法に関する調査票や、テキスト処理、データベース化のためのツールを組織的に整備すること。急速な進歩を遂げている情報処理手法を組織的に共有することが重要である。幸いパソコン、デジタルビデオカメラなどのハードウェアが安価に入手できるようになり、映像・音声データをインターネット上で放送できるようになったが、これを活かすには言語学特有の情報ツールとの組み合わせが必要である。

第三に、他の研究分野との連携研究が必要である。一般に言語学者は具体的なモノに弱い。民族を取り巻く生態系と物質文化の記述は、言語の記述と同様に重要であり、これには民族学、歴史学、農学、生物学、生態学など関連学問分野との共同調査・研究が必須である。

第四に、執筆や講演を通じて社会へ訴えかけること。危機に瀕した言語の「あからさまな死」を、日本人社会が他人事として気の毒に思っているだけではいけない。この問題は、我々の属する地域方言社会などの小さなコミュニティーが迎えつつある「緩慢な死」に直結する問題であることを、多くの人に訴える必要がある。

最後に、迂遠にも思えることだが、バランスの良い言語学者を養成すること。実践的調音音声学の訓練や、音韻から文法、意味に至るまでの、特定分野・理論に偏らない知

識だけでなく、テキスト処理などの情報処理能力も必須である。これだけ広範囲にわたる知識と技術の習得には、どうしても何らかの組織的支援体制を作る必要があると考えられる。

しかし必要なのはそれだけではない。フィールドワークは現地の人々との信頼関係があって初めて成り立つ。友好的な人間関係を築くコミュニケーション能力は、人柄によるところが大きい。調査は同時に調査者の人間性が試されているのだということを、現地に入る研究者に対して、強調してしすぎることはない。

言語学の発展に伴い、研究分野が細分化されてゆくことにより、言語現象そのものを総合的に見ようとする意欲が失われつつある。つまり、言語学の「オタク」化である。結果的に「コミュニケーションに問題のある者が言語学的な資質を持つ」という状況が生まれつつある。危機に瀕しているのは言語だけではない。近い将来「危機に瀕した言語学者」が深刻な問題になるのではないか。

参考文献

LeBar, F.M. et al. (1964): *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*, New Haven.

Schliesinger, Joachim (1997, 98) "Hill Tribes of Vietnam" 2 Vols, White Lotus Press.

大林太良 (編) (1984) 『東南アジアの民族と歴史』 (岡正雄他監修 『民族の世界史』 6), 山川出版社。

高谷 好一 (1985) 『東南アジアの自然と土地利用』 (東南アジア学選書 1), 勁草書房。

新谷 忠彦 (編) (1998) 『黄金の四角地帯 — シャン文化圏の歴史・言語・民族』, 慶友社。

橋本萬太郎 (1978) 『言語類型地理論』, 弘文堂。